

書 評

実践科学としての応用心理学

—— 2つの概論書から ——

押 見 輝 男 (立教大学文学部)

Teruo OSHIMI (St. Paul's University)

わが国の戦後の心理学も青年期に移行したせい、最近、そのアイデンティティに関する論議が目立つようになった。その一つとして、戦後の心理学がアメリカの心理学の追従に過ぎないことに対する不満、また、現実の社会問題と密接な関係をもつ研究領域が、現実から遊離しており社会的要請にできていないという批判が強まってきた。これらの問題意識と関連し、しかも、わが国の心理学の研究水準とその動向を整理して伝えてくれる2つの概論書—産業心理学と社会心理学—が上梓された。ここでは、この2つの概論書を取り上げる。

正田亘著「産業心理学」

(恒星社厚生閣, 1979, 245頁)

本書は産業心理学の研究成果をまとまりよく、また、きわめてわかりやすく説明した概論書である。しかし、類書と異なり、本書は著者正田教授の20余年に渡る研究実績を中心に、わが国の産業心理学者の研究成果を前面に押し出してまとめあげた意欲的な書である。このことは、例えば、人名索引の日本人研究者と外国人研究者の比率を検討しても明らかである。本書では日本人研究者数が外国人研究者数の2倍を占めている。従来の産業心理学の概論書では、この比率は逆であった。いうまでもないが、産業心理学は産業に係わる実際の諸問題の解決を目的とする研究部門であるから、本書の出現は、日本の産業心理学の輸入超過時代の終焉を告げるものといえるかも知れない。

著者の正田教授は終章「産業心理学の発展経緯」で、外国およびわが国の産業心理学史を簡明にまとめた後で、わが国の戦後の研究動向について言及している。この箇所は1979年に、著者が日本学術会議国内研究動向小委員会から委託された論文「産業心理学を中心とした

研究の動向」に基づくものである。本書では、学会報告された研究テーマ別頻度を検討した結果が紹介されている。その要点は、1) 「職業指導」、「適性検査」関係の研究報告は年代にかかわらず、安定した高い割合を占めつつけている、2) 疲労研究に関するものは1950年代以降衰退しつつある、3) 消費心理関係の研究の興隆が著しい、4) モラル・人間関係の研究は、1965年前後までは多いが、その後は動機づけ理論に関する研究(職務充実、職務拡大の問題)が多くなっている、5) 賃金の心理学的研究、余暇・中高年齢者問題、交通事故防止に関する研究が緊要な研究テーマとなりつつある、等である。評者のように産業心理学に直接関与していない者にとっては、これらの経緯の背景についても詳しい説明がほしいし、また、諸外国の研究動向も併せてふれてみると、わが国の産業心理学の特徴を知る上で参考になったと思われる。

終章以外の本書の構成は、職務分析と雇用、人事検査と適性配置、教育訓練とリーダーシップ、労働意欲、人事考課、作業研究、作業環境条件、安全管理、労使関係、消費行動の章仕立てになっている。類書との比較による本書の目立った特徴は、労使関係、消費心理関係の問題に独立した章が割り当てられていることである。とくに、労使関係の問題を概論書に含めたことは異彩を放っている。低成長期における日本の労使問題を考える上でも有意義な試みである。ただ、取り上げられている資料が若干古いことが気になった。次に、作業関係、とくに、安全管理の問題は、著者の長年に渡る研究テーマであるだけに、やはり本書の圧巻である。反対に、賃金の考察、労働意識、組織心理学等に関する言及が少なく、産業心理学の在り方を問題にしていないことなどは、物足りなさをひき起こすかも知れない。

本書はまた、各章を通して図表、見本が数多く挿入されているので、産業心理学の初学者や実務家にも便利で

ある。なお、“はしがき”では、著者の研究経歴の自己紹介と研究体験談が詳述されており、それが本書に対する親近感を醸す上で成功している。

築島謙三監修：人間探究の社会心理学

小川一夫編「1. 人間と社会」

(朝倉書店, 1979, 171頁)

野村 昭編「2. 人間と人間」

(朝倉書店, 1979, 188頁)

原岡一馬編「3. 人間と集団」

(朝倉書店, 1979, 159頁)

星野 命編「4. 人間と文化」

(朝倉書店, 1979, 155頁)

横田澄司編「5. 日本の社会心理学」

(朝倉書店, 1979, 173頁)

本講座は“序”によれば、この20年間のわが国の社会心理学の研究成果を顧みる目的から編纂されたものである。本講座全5巻は42名の俊秀による49篇の力作から構成されている。現在の社会心理学の状況は、社会心理学(社会学的社会心理学)と社会的心理学(実験社会心理学)への乖離、および、両者の統合への要請にある。本講座はこの現状認識に基づき、社会心理学の在り方を積極的に問うてゆこうとする迫力に満ちた姿勢で貫かれている。このような講座がわが国で出現したことは、日本の社会心理学の実力をはかる上だけではなく、社会心理学史的に見ても高く評価されるといえる。監修者、編者および各論文執筆者に対し深く敬意を表する。

本講座の特徴を、類似の体裁をもつ「講座社会心理学(全3巻)」(東京大学出版会)と対照させ調べてみた。その大きな差示の特徴は、第一に、本講座は第3巻「人間と集団」以外は社会学的社会心理学の方にウェイトがおかれていることである。実験社会心理学の研究成果が無視されているわけではないが、その重要なトピックスが欠けているか(例えば、態度変容、不協和理論)、取り上げられているものでも説明不十分なものがある(例えば、帰属の問題はJonesらの対応的推論理論のみ)。これは、評者が実験社会心理学の枠組から社会心理学を考えてきたために、余計気になる事柄なのかも知れない。

第二に、全5巻および各巻の構成が真にユニークである。第1巻「人間と社会」では、社会的欲求、印象形成、対人認知過程、自己意識、社会化、コミュニケーション過程と流行、欲望、偏見、コミュニティ心理学(都市化、過疎化、Uターン現象)が扱われ、第2巻「人間

と人間」では、社会学的・文化人類学的・心理学的な人間関係論、家族関係、地域・職場の人間関係、異文化からみた人間関係が論じられている。第3巻「人間と集団」では、集団パフォーマンス、集団過程、集団問題解決、リーダーシップ、集団内コミュニケーション、組織心理学、第4巻「人間と文化」では、知的能力と社会的欲求に関する比較文化的研究、文化順応・文化変容、社会化・人格成熟と文化、生活様式の変容と人格、文化と精神病理、モータル・パーソナリティ、異文化間コミュニケーション、異文化間研究における方法論が論述されている。さらに第5巻「日本の社会心理学」では、横田澄司教授の自己概念と社会的強化に関する研究、社会問題との関係からみた実験社会心理学批判、日本の社会心理学研究の展望(グループ・ダイナミックス、組織心理学、実験社会心理学、コミュニケーション研究、役割行動、社会心理史、<年報社会心理学>掲載論文)が収められている。群衆行動、政治意識などの項目はないが、取り扱われたトピックスの数、範囲は他に類を見ないほど壮観である。この特徴は監修者の社会心理学に対する姿勢の現われと思う。第1巻の編者の小川一夫教授は、社会心理学の定義としてニューカム(Newcomb, T. M.)のものを挙げている。つまり、個人心理学、社会学、文化人類学の meeting ground としての社会心理学である。

第三の特徴は、各巻共通のテーマとして、コミュニケーションの問題が設置されていることである。これは、コミュニケーションこそ、社会心理学が扱う現象の基底過程であるとの考えに依っている。

その他、本講座の各論文は丁寧、平易に記述されており、しかも、豊富な注釈が学習内容を深める上できわめて有効になっている。読者対象は一応、初学者となっているが、収録された論文は専門家にとっても刺激的で読みごたえのあるものが多い。

ここでは各論文を紹介する余裕はないが、1篇のみ個人的関心から選ぶとすれば、中村陽吉教授の「対人行動・集団過程と文化」(第4巻, 43~52頁)を挙げたい。この論文で中村教授は、実験社会心理学が歴史的・文化的要因を軽視しているという批判に対し、対人行動・集団過程の問題において、文化要因をいかに扱うべきかを考察している。そして、地域・階級・国家が異なる被験者の実験データをただ集める事後説明的方法を、実例を挙げて批判し、仮説検証的な研究の進め方のみが文化順応、文化変容に対し真に有益な示唆を提供できるとする。仮説検証的な研究とは「まず特定の文化要因がその文化の担い手である国民(地域住民とか階級所属成員で

もよい)の行動様式の差を生むか否かについての仮説が提起され、次に、その文化要因における変化をもっとも敏感に反映するであろう行動を定め、できるだけ一義的に当面の行動の生起の有無や程度を把握できる実験場面を設定し、そして、具体的にそれぞれの国民の示す反応の違いを分析していく」(46頁)進め方である。このアプローチの典型として、中村教授はレヴィン(Lewin, K.)の「社会的葛藤の解決」(1948)の中の諸論文を引用し検討している。現在、実験社会心理学の領域では、種々な側面から実験社会心理学の在り方や実験的手法に対する批判が加えられつつある(塩見論文「社会問題と社会心理学」第5巻, 21~36頁, 参照)。それと共に、実験的手法の有効性について懐疑的な雰囲気が芽生え始めている。しかし、中村論文を読むと、実験社会心理学に対し、まず批判すべき事柄は、実験社会心理学者が実験の条件統制の厳密さのみに心うばわれ、そもそも実験により検証すべき仮説の立て方において創造性を発揮していないことにありと思われる。確かに、こういう方面

からの実験社会心理学の批判と反省が、今必要なことではないかと考える。

本講座を一読した感想を述べると、本講座も2つのタイプの社会心理学の並列的加算的配列に終わっているという印象を拭えなかった。2つの社会心理学の異質性を鮮明にし、その統合化の困難さを痛感させる。しかし、本講座はそういう社会心理学の実体を顕現させ、今後の飛躍を促す潜在力を秘めており、この観点から高く評価されて然るべきだと思う。次に、第5巻の、日本における社会心理学の研究展望は、わが国の社会心理学の研究動向を知る上で大変有意義な試みであり勉強にもなった。それと同時に、わが国で発表された優れた諸研究が外国にフィードバックされない問題も痛感させられた。白樫三四郎教授が指摘するように(第5巻, 51頁)、英文による論文発表が必要な時期に至っているのだろう。それは日本の社会心理学の証明というより、アメリカ1国の社会心理学から脱皮し、ユニバーサルな社会心理学の誕生こそが緊要な課題だからである。